「むくげ通信２９１号、2018.11.25」

うたごえ運動で歌われた朝鮮の歌（１）

山根 俊郎

歌声喫茶

私は 1969 年に龍谷大学に入学したが、学園紛争真っただ中で碌に学校に行かずにパチンコ・麻雀ばかりしていた。そんな時に阪神百貨店に就職した高校の同級生の多田（53 年間、今も付き合っている)が梅田の歌声喫茶「こだま」に連れて行ってくれた。

店内は若者たちの熱気で満ちて大声で歌っていた。今思えば酒ではなく、コカ・コーラでよく歌えたものである。ロシア民謡が多かった。

その後、スナックのカラオケ、韓国スナックの韓国カラオケと私の歌声人生は流転する。

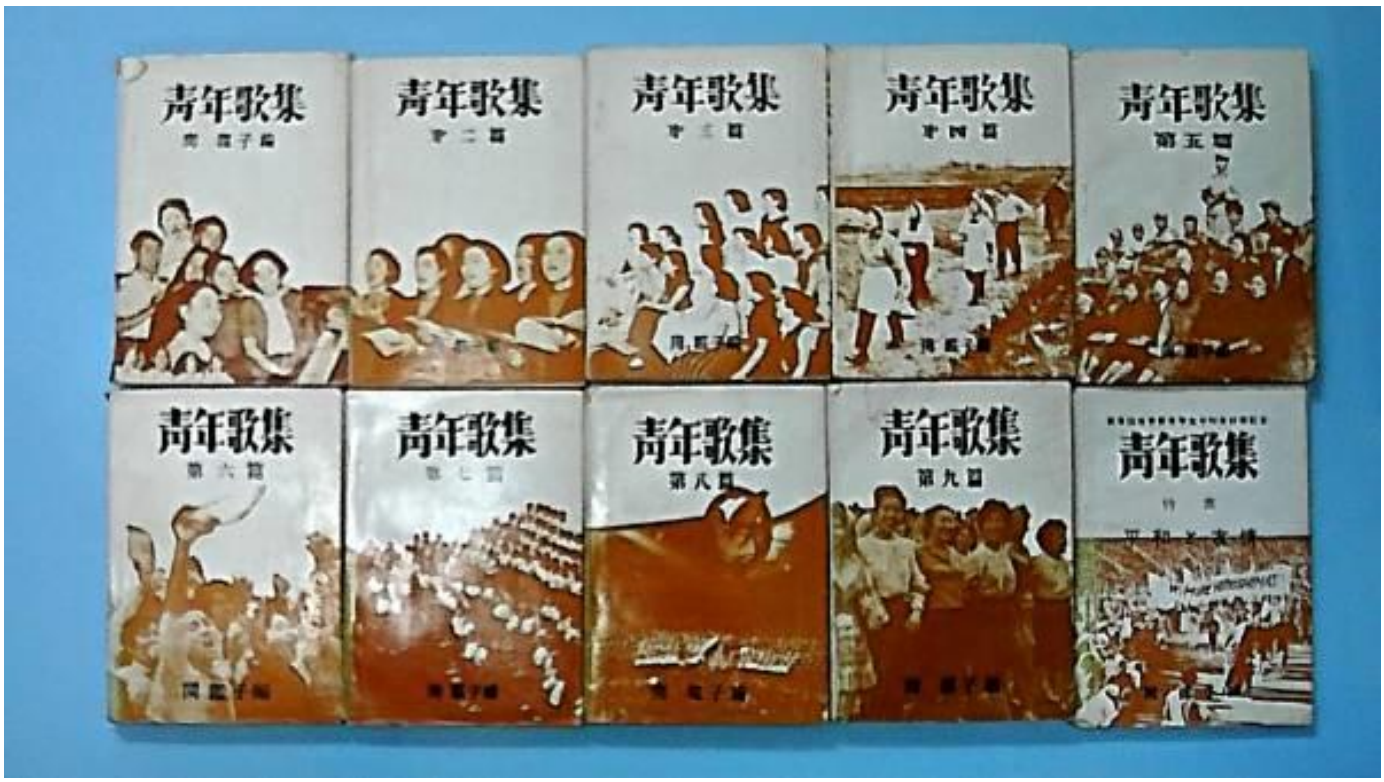
うたごえ運動の「青年歌集」

戦後、民主主義の時代になり合唱団の演奏活動である「うたごえ運動」が生まれた。指導者関鑑子（せき　あきこ・女性・1899-1973）のカリスマ、労働運動の高揚、共産党のバックアップなどで大衆的な文化運動、社会運動となった。

1948 年（昭和 23）関鑑子(あきこ)の指導のもとに、日本共産党系の青年労働者を中心とする中央合唱団によって始められた、合唱による平和運動。合唱の最初の「教典」となった『青年歌集』には、外国の民謡や歌曲が多かったが、のちには日本民謡や創作曲も数を増した。この創作曲のなかから『原爆を許すまじ』『しあわせの歌』なども生まれた。運動は労働組合や職場サークルから、一般大衆の間にも浸透した。関鑑子はこの功績によって 55 年国際平和スターリン賞を受賞した。以上は、ウェブサイト日本大百科全書の「うたごえ運動」の説明である。

私は 1974 年から尼崎市役所教育委員会の事務員になり、1980 年頃にある公民館に配属された。そこには「開かずのロッカー」があった。邪魔になるので壊して開けた。なんと 1955 年（昭和 30 年）発行の「青年歌集」第１篇～第４篇、合計４冊が眠っていた。

丁度、下の写真の上段の左からの４冊である。



ヤフオクに出品された「青年歌集」10 冊の画像

「青年歌集」の分析と疑問

私が 1990 年に『カラスよ 屍を見て啼くな 朝鮮の人民解放歌謡』（長征社〔今は廃業〕発行 4500 円　以下、本書と呼ぶ）を執筆した時には、「青年歌集」第１篇 「朝鮮」のジャンルで紹介された♪赤いチョゴリで働くおとめ、で有名な『建設』を創作した楽団カチューシャについては、「シベリアに抑留された日本人兵士が結成した楽団」程度しか分からなくて大きな疑問として残った。（本書 P318-P322）

「ロシア音楽出版会」の本

去る 11 月 11 日（日）、青丘文庫研究会 第 396 回在日朝鮮人運動史研究会 関西部会「吉本興業と韓流スター」発表 高祐二さん、に参加した時、立命館大学コリア研究センターの坂本悠一さんから「京都のロシア出版会の畠中英輔さんが山根さんの本に関心がある」とのことで、11 月 17 日（土）に京都市東山区松原通りの不思議茶屋バラライカ（雑貨と古本販売）＝ロシア音楽出版会を２人で訪問した。

畠中英輔さんは、1950 年生まれで私と同年配。

2015 年 11 月急性大動脈解離で４回の手術、７ケ月間の入院の後、両足不自由（身障２級）で車いす生活であるが、奥さんの介護もあり、とてもエネルギッシュな方である。

今までロシア音楽に関する本を８冊も自費出版されている。特に『ロシアの歌に魅せられた人々ーなぜロシアの歌が日本で歌われているのか？』（畠中英輔 蟹池弘美編 2017 年９月発行 2,300 円＋税）は、音楽舞踊団カチューシャの活躍を検証した本である。他に「カチューシャ愛唱歌集」の復刻など２冊の関連本がある。

編集の蟹池弘美（女性）さんも来られて、奥さんの手料理とウォッカを飲んで楽しく過ごした。

左の写真の 1970 年発行の「青年歌集」新版 第１篇～第 10 篇を貸していただいた。

「青年歌集」の新旧版の比較（１）

私が持つ「青年歌集」旧版**第１篇～第３篇** と「青年歌集」新版第１編～第３編に掲載された朝鮮歌謡について比較してみた。次ページの表参照。

第１篇は 1951 年（昭和 26 年）11 月 25 日初版発行以来、１年後の 1952 年（昭和 27 年）12 月 10 日に４版を発行している。驚異的に売れている。

第１篇ビフォー：１『解放歌』、２『南朝鮮の兄弟を忘れるな』、４『人民抗争歌』等 南朝鮮で歌われた解放歌謡が主流である。本書が復刻した『人民解放歌謡集』（1948 年在日本朝鮮民主青年同盟 東京本部文化部 編集発行）の朝鮮語の歌詞を日本語に翻訳して掲載したと思われる。

第１編アフター：朝鮮戦争後に南朝鮮労働党系が粛清されたため南朝鮮の解放歌謡は姿を消す。北朝鮮の永遠の大ヒット曲７『金日成将軍の歌』（1946 年 李燦作詞・金元均作曲）が登場した。

第１篇　第１編５『建設』（相沢治夫作詞・花井稔作曲）は、ハバロフスクの抑留者たちが朝鮮民主主義人民共和国の樹立を祝って創作して収容所内にいた朝鮮人たちに贈った歌である。帰国後、1949 年 11 月 27 日東京の日比谷公会堂で「帰還者楽団」（団員 40 余名）第１回公演で発表された。その後、楽団名は 1950 年５月「楽団カチューシャ」、1954 年１月「音楽舞踊団カチューシャ」に変え、ロシア音楽の普及に努める。33 年間活動を続け全公演回数 4000 ステージ、観客数 450 万人に達し、1984 年解散した。

第２篇朝鮮を代表する民謡８『トラジ』、９『アリラン』が紹介された。

10『人民遊撃隊の歌』（1949 年趙霊出作詞・金順男作曲）南朝鮮の智異山パルチザンを讃える歌。（本書 P315-P317）　第２編では削除された。

第３篇 11『畠へ行こう』の元歌は、1947 年『畑打ち打令』（ﾊﾟｯｶﾘﾀｰﾘｮﾝ・밭갈이타령、韓鳴泉作詞・咸弘根作曲）。朝鮮人学校でも歌われた。

12『民主の春』1954 年音楽舞踊団カチューシャ公演で「唄と踊り」が披露された。創作曲か？

第３篇 14『海の歌』（パダエ ノレ・바다의 노래、1947 年 金舜石作詞、朴韓奎作曲）に総連系の詩人許南麒（ﾎ・ﾅﾑｷﾞ）が訳詞で協力している。